

国際交流事業

姉妹都市締結25周年記念

山口市・パンプローナ市

IV



姉妹都市締結25周年記念事業実行委員会

(表紙写真説明)

パンプローナのエンシェロ (牛追い)

文豪ヘミングウェイの「日はまた昇る」で一躍世界中に名前が知られるようになった牛追い祭り。ナバラ王国時代から続くこの祭りは、放たれた15頭の牛と人間が競走する場面が圧巻です。毎年、パンプローナの市民は、この祭りに全精力をつぎ込むと言われています。訪問団にはパンプローナ市の特別の計らいで市役所バルコニーの特等席が用意されました。この名カットは、山口市国際交流室の山田寛之氏の撮影。

もくじ

・ もくじ	1
・ はじめに	2
・ 日程表	8
・ 訪問団紹介	10
・ 訪問団員手記	11
・ 思い出アラカルト	32
・ 新聞掲載集	40



サビエル城で



山口市・パンプローナ市姉妹都市締結25周年記念式典

2005年7月15日、山口市とスペイン・パンプローナ市との姉妹都市締結25周年記念式典がパンプローナ市内の城址シウダデラ公園で行われました。山口市からは武田寿生市議会議員を団長とする訪問団員32人が出席、在スペイン日本大使館の渡部公使とパンプローナ市長、同市議会議員など60名の方々のご臨席を賜りました。

「サビエルは、国境を越え、海を越えて私たち両都市をつなぎ、友愛の情をもたらす源です」とのヨランダ・バルシナ市長の歓迎のあいさつに、武田団長は「今回の訪問が今後の両市の友好の絆を一層確実なものとし、パルケ・デ・ヤマグチに植樹した桜の木のように年を追うごとに大きく成長して行くことを祈念しています」と両市の友好のさらなる発展への願いを伝えました。さらに、パンプローナ市から同市の守護聖人サン・フェルミンの像が贈られ、山口市からは大内塗りの盆を、また山口ナバラの会から浮世絵入りの風呂敷100枚（うち50枚はナバラ州政府へ）を贈りました。

灼熱の太陽が照りつける40度近い猛暑のなか、訪問団の男性陣はブレザーにネクタイを着用し、女性は和装で臨みました。国際的な式典に参加するのは初めての方もいましたが、式典は緊張の中にも友好的な雰囲気の中で進められました。式典の終わりには、地元の合唱団から日本の歌の演奏がプレゼントされ、列席者の心を和ませてくれました。

このあと訪問団一行はパンプローナ市立山口公園（パルケ・デ・ヤマグチ）に移動、これまで植えた20本の桜の木のそばに、新たに5本を追加植樹し、姉妹都市締結25周年を祝いました。

翌日、一行はパンプローナ市立図書館のヤマグチ文庫を見学、今回新たに『坊ちゃん』のスペイン語版の書籍や紙芝居などを贈りました。



姉妹都市締結25周年記念式典議長挨拶

山口市議会議員 武 田 寿 生



メ ジャモ ヒサオ タケダ（私は武田寿生です。）

ソイ プレシデンテ デ コンセッホ ムニシパル（市議会議員です。）

訪問団を代表いたしまして一言御挨拶を申し上げます。

ヨランダ・バルシナ市長様をはじめパンプローナ市の皆様、本日は私ども訪問団のためにかくも盛大な御歓迎を賜り、心から感謝申し上げます。

私どもは13日に姉妹都市締結25周年をともに祝うため、今から約450年前に聖フランシスコ・サビエルが訪問された、遠く山口の地よりやってまいりました。

昨日は、世界的に有名な『サン・フェルミン祭』を見学して、パンプローナ市民の燃え上がるような情熱を肌で感じるとともに、緑に囲まれた美しいパンプローナ市の街並みを拝見し、御地の歴史の重みを感じることができました。

これまでの25年間で振り返りますと、相互の親善訪問や児童による絵画の交換など、多種多様な分野で交流を行い、友情を深めてまいりました。

その中でも、今回の訪問団に同行しております『山口市造園協会』とパンプローナ市との協力により成し遂げた『山口公園』の建設は、山口市とパンプローナ市との友好交流の象徴と呼べるものであると考えております。

事前に写真などを見ておりましたが、実際、山口公園に立ちますと、その美しさと広さに圧倒される思いがいたしました。また、パンプローナ市民の皆様の公園内でくつろぐ姿を見ますと、この公園が皆様に愛され、親しまれていることが感じられ、大変嬉しく思っております。

私どもの山口市にも、パンプローナ市との深い絆と交流を象徴するものとして『山口サビエル記念聖堂』がございます。美しい二本の塔を持つその姿は、山口の風景を語るうえで欠かすことのできないものであり、響き渡るその鐘の音は山口市民の心の安らぎを与え、山口市民の生活に無くてはならない存在となっております。

1980年に提携した『姉妹都市提携盟約書』には、「両市間の友情と理解を深め、親善の促進を図るとともに、このことが世界の平和に貢献することを確認し」とあります。両市民の未来永劫の友情を願った強い思いを感じるところでございます。

25年経った現在も、そしてこれからも、友好の絆を締結したあの時の思いを大切に、山口市とパンプローナ市との友情を今後も深めてまいりたいと考えております。

終わりに、この25年間両市の交流を支えていただきました関係各位に厚くお礼を申し上げますとともに、パンプローナ市のますますの御繁栄と、御臨席をいただきました皆様の御発展と御活躍を祈念いたしまして挨拶といたします。



パンプローナ市長歓迎の挨拶

パンプローナ市長 ヨランダ・バルシナ



このたびパンプローナ市は、山口市の兄弟姉妹を迎えました。山口市の訪問団にサン・フェルミン祭を体験して頂き、祭りは終わりましたが、こうして国境を越えた友情を確認できたことは私たちにとってこの上ない喜びです。

今年は山口市とパンプローナ市とは姉妹都市として銀婚式、つまり25周年を迎えましたが、聖フランシスコ・ザビエルが両市を400年前から結びつけてきました。来年私たちはサビエル生誕500周年を祝う予定です。このナバラの聖人の存在こそが私たちの友情の源であり、国境を越え、海を越え、両国を結びつけ、両市が共に歩めるようにしてくれたのです。

今日、25周年を記念して山口公園に5本の木を植樹することで、桜の木が25本になります。25周年に対して25本の木です。将来、必ずや私たちの関係も実り多いものとなり、また桜の木はこの日本庭園を友情のシンボルとして飾ることでしょう。

パンプローナ市と山口市との関係は、東洋と西洋との類い稀な結びつきであり、四半世紀に渡って私たちは友情を深めてきました。25年間の努力と協力により、今日私たちはこの式典をはじめ数々の行事を執り行うことができたのです。

私たちはこの式典で、姉妹都市締結時の相互理解や世界平和への願いを新たにしたいと思います。25年を経過したいま、当時からの私たちの願いである友情、固い絆、平和、自由への願いを求め続けたいと思います。

山口市訪問団の皆様、山口市と山口市民の皆様の友情は私たちの誇りです。また、皆様をパンプローナ市にお迎えし、姉妹都市締結の式典を行うことは私の喜びです。

パンプローナ市によろこそ。

(訳：吉武真紀)



RECEPCIÓN A LA DELEGACIÓN DE YAMAGUCHI XXV ANIVERSARIO DEL HERMANAMIENTO

Buenas tardes:

Pamplona recibe esta tarde a nuestros hermanos japoneses de la ciudad de Yamaguchi. La delegación de esta ciudad hermana ha podido disfrutar y conocer nuestras fiestas de San Fermín y hoy, una vez terminadas, tenemos el inmenso placer de **renovar nuestros votos de amistad y hermandad internacional.**

Cumplimos este año las **Bodas de Plata**, los 25 años, de nuestro hermanamiento, aunque la figura de **San Francisco Javier** hace que nuestras dos comunidades tengan más de cuatrocientos años de relación. El legado de este santo navarro, de quien este año celebraremos el **Quinto Aniversario de su nacimiento**, es la raíz de esta amistad que une nuestros pueblos sobre las fronteras y los océanos y que proyecta en nuestras dos ciudades un destino común.

Hoy vamos a simbolizar estos veinticinco años de hermandad, con la plantación de **cinco nuevos cerezos** en el parque de Yamaguchi, que aumentarán así, hasta veinticinco, el número de estos árboles. **Veinticinco árboles por veinticinco años** que, sin duda, seguirán floreciendo en el futuro y adornando este parque japonés símbolo de nuestra amistad.

Pamplona y Yamaguchi formamos un **tandem urbano**, una exitosa combinación de **oriente y occidente** que ha dado numerosos frutos a lo largo de este cuarto de siglo. **Veinticinco años de trabajo y colaboración** solidaria que hoy celebramos y refrendamos con esta recepción y el resto de los actos oficiales de este día.

Una celebración que quiere ser una confirmación de nuestra **Carta de Hermandad**, una afirmación de los buenos deseos y de los objetivos de **comprensión mutua** y de **contribuir a la paz** en el mundo. Por eso hoy, veinticinco años después de aquella firma, queremos **volver a decir que sí** a todo ello: sí, a la amistad; sí, a la unidad; sí, a la paz; y sí, a la libertad.

Señores delegados de la ciudad de Yamaguchi. Es un verdadero honor poder contar la amistad de su ciudad y de sus ciudadanos. Y es para mí un verdadero placer poder recibirles en Pamplona y **ratificar la hermandad** existente entre nuestras dos ciudades.

Muchas gracias y bienvenidos a Pamplona.



山口市・パンプローナ市姉妹都市締結25周年記念事業実行委員会

実行委員長 山口ナバラの会 会長 多々良 孝 一



このたび山口市・パンプローナ市姉妹都市締結25周年を記念して友好訪問を実現する為に実行委員会を設置し、山口市商工会議所・山口ナバラの会・山口市造園協会の皆様と協議のうえ実行案を決定しました。

- 1 友好提携締結記念公式行事への参列
- 2 山口公園の日本庭園への造園協会会員による管理指導
- 3 山口公園内への桜の記念植樹 5本
- 4 ナバラ州政府への公式訪問ならびに昼食レセプション参加
- 5 サン・フェルミン祭（牛追い祭り）の見学
- 6 サビエル城、アンダルシア地方の見学観光等

以上の計画で皆様方へ参加のお願いをする事にしました。

委託旅行会社の選定については4社の見積（代金、旅程内容）等を慎重に審議した上でサンデン旅行（株）山口支店に決定しました。

公式訪問団（山口市関係6人）を含めた募集人員を30名としました。

山口市報に発表すると同時にパンフレットを作成し募集を始めたところ、すぐに30名の参加申込がありました。最終的に32名の訪問団を組織、事前にスペインについて勉強会を開催。第1回は、吉武真紀さんによるスペイン語講座と、サンデン旅行の石田さんによる旅行の説明・注意点等。第2回では、山口県国際交流員アレクサンドラ・メセゲル氏を講師にスペインの現状や習慣、歴史、またスペインの通貨について学びました。

7月11日、山口市市民会館前を13：00に出発し、11日間の旅が始まりました。長時間の空の旅を皮切りに12日午後11時発マドリッドよりパンプローナまで新型特急「アルタリア」での列車の旅、良かったですね。パンプローナ、サン・フェルミン祭、牛追い（エンシェロ）等もりだくさんでした。

7月15日、ハビエル城の見学後、シウダデラ公園にてパンプローナ市歓迎式典、のち山口公園にて桜の記念植樹。

7月16日、ナバラ州政府庁舎でのナバラ州政府歓迎式典。

ここで公式行事を終り、市民訪問団の皆様の観光の始まりです。毎日38℃前後の中をバスで巡る、コルドバ、セビーリア、グラナダ、ネルハ、フリヒリアナ、マラガとアンダルシアの旅へ。

7月20日、15：45ヒースロー空港より成田空港へ。

7月21日、11：05成田空港着。

羽田空港で久しぶりの日本食。ビール、すし、おいしかったですね。

福岡空港より貸切バスにて19：15分山口市民館前へ無事帰着。全員の皆様が元気にバスを降りられました事を実行委員長として心よりお礼申し上げます。また市長はじめ関係者の皆様のお出迎えをいただきました。ありがとうございました。

いかがでしたか。次回は来年5月上旬、サビエル生誕500年祭への参加を計画していますので、ご参加よろしく願います。



日程表

山口市役所関係者

	月日	曜	時間 (現地)	交通機関	日 程	備 考
1	7/11	月	12:45 12:55 16:30	貸切バス JL-1724	出発式 山口市民館横バス停車場より出発 福岡空港より羽田空港へ ホテルへ	ホテル泊
2	7/12	火	13:20 20:35 23:50	BA-008 BA-7057 貸切バス	成田空港発（ヒースロー空港へ） ヒースロー空港発 マドリッド着 ホテルへ	ホテル泊
3	7/13	水	午前 14:10	貸切バス タルゴ200	マドリッド見学 特急でパンブローナ市へ ホテルへ（トリップ サンチョ ラミレス） ヨランダ市長ホテルで歓迎の出迎え	ホテル泊
4	7/14	木	8:00 9:30 14:00 18:30 24:00 1:00		市役所バルコニーから牛追い観戦 巨人入形の行進 『国民文化祭やまぐち2006』のPR 巨人入形の踊り 闘牛場にて闘牛観戦 サンフェルミン祭閉会式（パンブローナ市役所） ホテルへ（トリップ サンチョ ラミレス）	ホテル泊
5	7/15	金	20:00 21:30		ハビエル城視察 Cuidadela公園にて市歓迎式典 議長挨拶・記念品贈呈・図書の寄贈 山口公園記念植樹 レストランにて夕食 ホテルへ（トリップ サンチョ ラミレス）	ホテル泊
6	7/16	土	9:00 12:00 15:55	徒歩 IB-8537	やまぐち文庫館視察 ナバラ州政府歓迎式典 パンブローナ空港よりマドリッドへ ホテルへ（ウエリントン）	ホテル泊
7	7/17	日	10:00 12:30 15:45	専用車(4h) BA-457 BA-007	ホテル発 マドリッド空港へ移動 マドリッドよりヒースロー空港へ ヒースロー空港発	機内泊
8	7/18	祝	11:05 15:00 16:40 19:30	ジャンボタクシー JL-1725 ジャンボタクシー	成田空港着 羽田空港より福岡空港へ 福岡空港着 山口着	

山口ナバラの会及び市民訪問団

	月日(曜)	日	程
1	7月11日 (月)	12:45 山口市民館前 12:55 山口市民館前出発 16:30 福岡空港出発 18:35 羽田空港発	出発式 15:10福岡空港着 18:05羽田空港着JAL1724便 19:40ホテル着 貸し切りバス20:10空港で食事 【成田泊】
2	7月12日 (火)	10:00 ホテル出発 13:20 成田空港発 17:40 ロンドン着 20:35 ロンドン発 23:50 マドリード空港着	空港で出発式 BA-008便(定刻10分遅れ)所要時間12時間20分 (時間定刻25分遅れ)*これより現地時間に表示(東京-8時間) (定刻60分遅れ)BA462便 所要時間2時間15分*時差(東京-7) ホテル着は24:40 【マドリード泊】
3	7月13日 (水)	9:00 ホテル発 10:00 トレド着 12:10 トレド発 14:10 マドリード発 17:30 パンプローナ着	バスで移動 【世界遺産】トレド、カテドラル見物、サント・トメ教会 エル・グレコ「オルガス伯爵の埋葬」見学 バスで移動 新型タルゴ特急「アルタリア」一等車、車内食 18:10ホテル着後 山口公園見学 21:00夕食 【パンプローナ泊】
4	7月14日 (木)	7:00 ホテル出発 (終日パンプローナ市内)	牛追い祭り見学へ 8:00牛追い祭り開始 巨人の踊り、市役所前広場での見学、14:00昼食 サラサーテ像等見学、木陰で休憩 18:30闘牛見物~20:00【パンプローナ泊】
5	7月15日 (金)	9:00 ホテル発 12:15 サビエル城発 13:30 オリテ城到着 16:25 オリテ城出発 18:30 歓迎式典 20:30 山口公園で植樹 21:30 夕食会	10:00レイレ修道院、サビエル城見学 オリテ城見学後、城内で昼食 17:00ホテル着、一旦ホテルで着替え この日パンプローナ市44度 会場:OTAZUワイナリー、24:30終了 【パンプローナ泊】
6	7月16日 (土)	8:50 ホテル発 9:35 市立図書館発 11:45 州政府で歓迎式典 13:20 サンス首相主催昼食会 15:55 パンプローナ空港発 17:00 マドリード空港着 20:30 ホテル発	市立図書館へ記念品の贈呈 マイヨール広場付近で買い物 ~14:20 14:50パンプローナ空港 イベリア航空8537便 所要時間1時間5分 フラメンコ見学 23:00ホテル着 【マドリード泊】
7	7月17日 (日)	8:40 ホテル発 11:30 マドリード市内出発 13:15 コンスエーグラ着 13:30 コンスエーグラ出発 18:50 コルドバのホテル着	プラド美術館、スペイン広場など見学 ドンキホーテの故郷ラ・マンチャ地方の中心地コンスエーグラ村 14:00ドンキホーテの旅籠で昼食 23:00まで庭で過ごす 【コルドバ泊】
8	7月18日 (月)	9:00 ホテル発 11:35 コルドバ発 12:45 セビーリア着 18:00 ホテル着	【世界遺産】コルドバ市内ユダヤ人街歴史地区、【世界遺産】メスキータ見学 【世界遺産】カテドラル、ヒルダの塔見物、16:55市内見物終了、買い物 20:30夕食 【セビーリア泊】
9	7月19日 (火)	8:45 ホテル発 14:00 アルハンブラ宮殿着 16:10 アルハンブラ宮殿出発 16:40 空港へ清水さん出迎え 19:10 ネルハのホテル着	10:15~10:45トイレ休憩 アンダルシア平原経由 【世界遺産】アルハンブラ宮殿見学 清水さんマドリードから空路合流 【ネルハ泊】
10	7月20日 (水)	8:45 ホテル発 10:00 マラガ空港着 12:55 マラガ空港発 14:45 ヒースロー空港着 15:45 ヒースロー空港発	途中アンダルシアの白い村「フリヒリアナ」見学 BA-6983便(定刻10分遅れ)所要時間2時間40分 BA007便(ON Time)所要時間11時間20分 【機中泊】
11	7月21日 (木)	10:50 成田空港着 11:55 成田空港発 15:05 羽田空港発 17:10 福岡空港発 19:30 山口市民館前着	貸し切りバス 12:55 羽田空港着 JAL1725便 16:40 福岡空港着 サンデン貸し切りバス

訪問団紹介

市役所関係者

氏 名	役 職
武 田 寿 生	市議会議長
徳 田 時 男	総務部長
古 屋 光 男	総合政策部参事（秘書課）
富金原 勉	市議会事務局参事
山 田 寛 之	国際交流室主任主事
吉 武 真 紀	通訳・奈古高校教諭

山口ナバラの会関係者

（あいうえお順）

氏 名	住 所
荒 瀬 剛 一	山口市平井
荒 瀬 美知子	山口市平井
伊 藤 謙 二	山口市駅通り
入 江 幸 江	山口市大内
岡 本 薫	山口市大内
岡 部 敏 雄	山口市下小鯖
合 志 愛 子	山口市吉敷
小 林 真 人	山口市大内
駒 井 末 次	山口市湯田温泉
佐 藤 宣 子	山口市吉敷
清 水 良 子	山口市大内
竹 下 隆 司	山口市宮野
多 々 良 孝 一	山口市吉敷
田 中 和 枝	山口市佐山
福 田 百合子	山口市宮島町
福田シモーネさくら	在サンパウロ市

氏 名	住 所
堀 田 健 一	ラ・フランチェスカ
堀 俊 夫	山口市吉敷
松 崎 カヨノ	山口市矢原
森 郁 子	広島市西区
山 野 タ エ	山口市糸米
安 田 武 勝	防府市桑南
安 田 雅 子	防府市桑南
冷 泉 智 子	山口市幸町
石 田 恭 嗣	サンデン旅行（株）
西 山 和 則	サンデン旅行（株）

訪問団員手記

パンプローナ訪問記

山口市議会議員 武田 寿生

もう行くことはないだろう、と思っていたパンプローナ市は5年前、姉妹都市締結20周年に初めて訪れて今回は2度目である。でも、今回は前回とは少し違う。公式訪問団で、しかも団長というお世話役である。幸い、以前から親しくしていたサンデン旅行の石田氏が添乗し、議会事務局の冨金原参事も同行していただける。安心して出発しよう。



到着した5年ぶりのパンプローナ市はサンフェルミン祭の真っただ中、明日が最終日という日だった。お祭りで多忙であるにもかかわらず、特急電車「アルタリア」で到着したパンプローナ駅にはヨランダ市長が白の上下と赤のスカーフ、赤の腰帯というお祭りの衣装で出迎えてくれていた。これから、公式行事が予定されている4日間が始まる最初の出会いだ。駅の歓迎ムードに一安心したところである。

サンフェルミン祭で盛り上がるパンプローナ市での行事は、国際交流室の山田氏がパンプローナ市儀典長のマルキーネス氏と打ち合わせをしながら進めてくれる。予定とは別に直近にならないと決定しないこともあり、公式訪問の難しさを思い知ることとなる。予定外といえばこんなこともあった。

祭りのハイライトでもある、「牛追い」を朝8時から見学し、「カフェ・イルーニャ」でチュロとチョコレート朝食を終えた後、突然の地元ラジオの出演依頼。引き受けることとし、冨金原参事と吉武真紀先生、地元の鈴木啓子通訳と近くのビルの一角にある「コペ」という会社が運営するFMナバラのスタジオへ向かう。よくしゃべる女性のパーソナリティと地元の自治会長と同席し、パンプローナの印象など聞かれたが、どうも話題は地元のタブロイド新聞のトップに掲載されている写真らしい。"inconsciencia"（無神経）の見出しで牛追いの牛が走るすぐそばを肩を組んで笑って走っている東洋人のカップルの写真だ。死傷者が出るかも知れないところに、カップルで、しかも肩を組んで笑っている。地元の人が見ると奇異に映るのだろう、だから新聞のトップを飾るのか。しかもよく見ると前日の新聞、我々が来たら聞いてみたいと話題にしたらしい。世界中から集まるサンフェルミン祭、いろいろな観客がいてもいいのでは、と思ったが、通訳を介しての話は伝わったのか、伝わってないのか分からないまま、祭りの感想など話して20数分出演したことになった。予定にないラジオ出演、私にとって思い出の1つである。

スタジオを後にして昼食後はヨランダ市長と同席しての闘牛見学、夜11時からのシウダデラ公園で上がる花火見物、市庁舎バルコニーでの祭り閉会式への参列で、朝7時から行動した長い長い1日がようやく終わった。加えて明るく日の歓迎式典や山口公園での桜の植樹、ワイン工場でのレセプションなど、どの公式行事も、楽しくも緊張の連続の2日間であった。

すべての公式行事を終え、カテドラルを市長と一緒に見学した後、お世話になったお礼と再会を約束し、「アディオース」でふっと気が抜けた感じを覚えている。

いま、振り返り、公式行事にお付き合いいただいた市民訪問団の皆様のご協力と、すべての行事を大過なく終えることが出来たことに深く感謝している。

山口市総務部 徳 田 時 男

7月15日

今日から、公式行事の始まりで、姉妹都市締結25周年記念式典は、ハビエル・マルキネス氏の司会進行で、渡部和男駐スペイン日本国大使館公使のご臨席のもとに、市長・議長の挨拶、記念品の贈呈、歓迎の合唱と粛々と行われました。

(パ市の記念品は大変重いもので、ヨランダ市長から握手を求められた武田議長が片手で持つことが出来ず、テーブルに置いてから握手に応じたほどでした。帰りのマドリッドの空港では、記念品を入れた山田さんのトランクが重量オーバーとなり、オーバー分を手荷物として各自が分担することによりOKとなりました。)

その後、山口公園で桜の記念植樹を行いました。事前の打合わせでは、議長以下5名それぞれ、5本の木を植樹する予定でしたが、市長・議長がシャベルで土かけをした後、市民訪問団も含めて全員で記念植樹をすることが出来ました。また、公園には市民の方々も来ておられましたので、ちょうちん七夕と国民文化祭の宣伝を兼ねて団扇とパンフレットを配布しました。

この日最終の公式行事である歓迎晩餐会がオタス領主館で行われ、その途中でヨランダ市長から、「余裕のないスケジュールとなっておりますが、買い物をする時間が必要ですか」と問われましたので、「はい、1時間ぐらい」と答えましたら、「わかりました」と返事が返ってきました。(最終日に30分ではありましたが、買い物をする時間をとっていただきました。おかげでワインを入れる草袋を手に入れることが出来ました。)

会はその後も続いておりまして、16日になってだいぶ経過した頃、また市長から「お疲れですか」聞かれましたので、「大変疲れております」と答えると、更に「この会を終了した方が良いですか」と問われ「はい」と答えますと、早速マルキネス氏を呼ばれて指示され、予定された行事を無事に済ますことが出来ました。

山口市秘書課 古 屋 光 男

今回の公式訪問団の一員に加えていただいたとき、出来たら現地の一般市民との交流が出来たらいいなあという思いがあった。その機会は現地滞在2日目の自由時間に訪れた。

街は祭り一色、朝からあちこちでお酒、音楽、ダンス、パレードと大賑わい。我々一行も、その雰囲気の中、ダンスの輪に入った。その時、ややご高齢の婦人が私に「ヤマグチ?ヤマグチ?」と話し掛けてこられた。「シィ」と返答をすると、何やら身振り、手振りで迫ってこられた。どうやら私が



纏っていた陣羽織（赤地に金の大内菱が入っているもの）が気に入られたご様子。

一瞬、定価5,000円が頭をよぎったが、ここは一番、親善、親善。プレゼントすることにした。ご婦人は大層お喜びで、ポケットの中を探られる。お金を出されるのかなと思い、「ノ、ノ」と言うと、出してこられたのはスペイン国旗のバッジ、私の襟に付けられる。有り難くいただくことに。

その後、何人かの訪問団の方々が陣羽織を当地の関係者にプレゼントされたとのこと。

ところで、このご婦人はこの後行われた闘牛の観戦にもこの陣羽織を着て行かれ、それを見られた市長さんが、訪問団の武田団長に「何故あのご婦人は陣羽織を着ておられるのか。」と聞かれたとのこと。

何れにしても、ある部分で一般市民の方との交流が出来たことは大変うれしく思われた。今後は行政間の親善交流はもとより、市民レベル、特に、子供達同士の交流がもっと盛んになるような企画を充実することが、末永い国際交流に連なるのではと思った次第である。



山口市・パンプローナ市姉妹都市締結25周年記念公式訪問旅行記

山口市議会事務局 富金原 勉

「太陽と情熱の国」スペイン国訪問は私にとって突然の、しかも初の欧州への旅でもあった。

現在、スペイン語圏の諸国は南米、中米など20数ヶ国に及ぶらしく、海外へ進出していったこの国の国民性の源はどこにあるのか考えたとき、そこには宗教的なものが大きく介在しているのではないかとも思った。

この国の国旗は血と金を表しているようで、一見野蛮、強欲に受けとめられるが、どこの国の歴史を見てもそれらと無縁な国々はない筈でもある。

血と金の象徴の真意は別の所に有るのかもしれないが、コロンブスが黄金の国ジパングを目指したことと果たして繋がるのであろうか。

この時代のスペイン、ポルトガルなどが先頭をきって西欧外の国々に向かった歴史上の事実としてスペイン語圏の国々の多さが残っているわけでもある。

気候的には、刺すような暑さがあるが、不思議とハンカチで汗を拭うことはなく、オリテ市内での40℃の電光表示に驚きもしたが、湿度が低いためであり、高温多湿の日本と比べ羨ましい限りである。

また、日没が21時過ぎで、そのためシエスタ（昼寝）があるのも現地に行き理解できたように思えた。

私の総務課勤務時代の平成13年にヨランダ市長ご一行をお招きしたときの歓迎式典の折、1組のご



夫婦がかなり遅れて来られたが、罪悪感もなく堂々と入場されて来られ驚いたこともあり、これもまさにシエスタなのであった。

パンプローナ市民とのふれあいで印象に残るのが、カフェ・イルーニヤでの踊りへの参加というか、後から市民の方に無理矢理押されてやむなくの参加、こちらはカメラを一生懸命回しているのにである。

踊っているというか、ジェンカの隊列で音楽に合わせグルグル蛇行の踊りを繰り返している中、何故か胸が熱くなり、このごろ感動を覚えることのない我が涙腺を刺激した。

何故なのか自問自答するに、パンプローナ市民のおもてなしへの感謝の念、加えて私はあの種の音楽が非常に好きだからかなとも思った。

片道1万キロあまりの十数時間に及ぶ長旅を終えたあとの思いとして、往路で飛行機の座席のPTVのナビ画面をひたすら追い、まだロシア上空かと思ったが、サビエルの時代は船旅で航海術めざましく発展した中での日本への旅路であったようだが、正直あの時代あんな遠くからひたすら布教のために日本まで来る大儀の背景は何なのか、私にはなかなか理解し難い。

今回のスペイン、アジア圏の中国、韓国の3国しか旅したことはないが、今回の西欧圏のスペインはアジア諸国と我が国の文明上の深いつながりとは異なり、サビエル生誕500年を迎える今もパンプローナという土地とピンポイントでしっかりつながり、ヤマグチという言葉がパンプローナ市民に通用することが山口市民の一人として非常に嬉しいことであった。

パンプローナ訪問を終えて

山口市国際交流室 山 田 寛 之

「山田君、パンプローナ訪問の随行よろしく頼むよ。」そう室長に言われた日から、私のパンプローナへの旅がはじまりました。

国際交流担当になって3年。その間、パンプローナ市とは何度か交流の呼びかけがありましたが、残念ながらどれも実現しませんでした。そんなこともあって「いつかパンプローナへ行ってみたい。」との密かな思いを持ち続けていただけに、今回随行に選ばれたことはとても幸運でした。



今回の訪問では、パンプローナ市歓迎式典、ナバラ州政府歓迎式典、山口公園への桜の記念植樹などの記念式典以外に、牛追い祭りとして有名な『サン・フェルミン祭り』の見学や、公立山口図書館への図書・紙芝居等の贈呈、山口市造園協会による山口公園日本庭園の整備、庭園管理法の指導などを計画し、記念の年にふさわしい交流を行うため、一行はパンプローナへと向かいました。

初めて降り立ったパンプローナはとても暑く、また『サン・フェルミン祭り』の期間中ということもあり、街は赤と白の衣装を着た人であふれていました。古いものと新しいものが同居した街並みは、とても美しく、緑も豊かで暮らしやすそうな印象を受けました。パンプローナの街で一番印象的だったのは、やはり『山口公園』でした。緑におおわれた公園はとても美しく、公園と街との境に何の壁も柵も無く、人々が自然と足を運びくつろぐ姿は今でも忘れられません。

また『パンプローナの人々のホスピタリティ』も、今回の訪問の中で忘れることができないものの

一つです。私たちが訪問した時期は、パンプローナの一年で一番忙しい時期で、特に市長は朝早くから夜遅くまで分刻みの行動でした。そのような中でも、遠路はるばる山口から来た『友人』のために、市長は休む間を惜しんで対応をしてくださいました。この姿に訪問団員も感動したと思います。

また、今回受入を担当したパンプローナ市役所のハビエル・マルキーネス氏との出会いも、私にとっては良い思い出となっています。市長の儀礼担当の彼はとても忙しく、限られた時間しか話すことができませんでした。そんな状況の中でも、お互い同じ仕事に携わる者として、言葉で伝えなくてもお互いの状況と気持ちを分かり合い、思いやることで今回の記念行事を無事に終えることができたことは、この上ない喜びでした。

今回の記念訪問は、多くの交流と感動を生み、パンプローナとの友情を今まで以上に深めるものことができました。これも企画から実施までお世話いただいた山口ナバラの会、山口市造園協会、山口商工会議所の方々、そして何より訪問にご参加いただいた市民団の皆様のご理解とご協力があったことです。終わりにになりましたが、この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

郷に入っては郷に従え？パンプローナの思い出

吉 武 真 紀

スペインから帰国してしばらくして、山口市役所の山田さんからファクスがきた。訪問団の記事が載った現地の新聞を翻訳して欲しいということだった。パンプローナ滞在中はゆっくり新聞を読む時間はなかったが、読んでみるとスペイン人の視点で書かれていて興味深かった。

まず、パンプローナ駅に到着したところからだ。着いてすぐ名刺を取り出した日本人に驚いたようすで「名刺を交換するのが日本では一般的だと思うわ。」とあった。そういえばあの時、パンプローナ市の方々は戸惑った様子で「今は名刺を持っていませんので後で差し上げます。」と言われていた。



また山口公園で鯉のぼりを揚げたことにも触れてあり、「鯉のぼりは旗と凧の間のようなもので・・・」と表現されていて、これも面白かった。

しかしわたし個人としてのカルチャーショックを感じたのはワイナリーでの食事の時だ。食事が始まり、しばらくしてから、日本から持ってきたお土産を渡すタイミングについて相談しようと席を立つと「デザートまでは座っていてください！」と、いつもはにこやかなハビエル・マルティネスさんにぴしゃりと言われた。習慣の違いを考えず、無神経なことをしたと反省した。これが日本なら、皆がお酒を注ぎに行ったり来たりするところだが・・・。

今回の訪問でも、文化の違いに戸惑うことはあったが、違いを認め合ってこそ国際交流が出来るのだろう。サンフェルミン祭で、牛の前を命を懸けて走るスペイン人を見れば国民性の違いは実感できる。

それにしても夕食が遅いのは辛かった。9時から3時間もかけて食事をするとは！スペインの人と付き合うには睡眠時間が1日5時間でも平気でいられる体力が必要ですね。皆さん、お疲れ様でした。

スペインの印象

荒瀬 剛一・美智子

初めてのスペインの旅、期待と不安で参加した。あの暑さの中での10日間であったがお蔭で2人共元気でみなさんと共に行動できたことに感謝している。わずかの期間であったがスペインの素敵な文化遺産に触れ又自然や国民性にも接して初めて人間の生きざまを感服した。

公式行事は、日程上やや不満もあったが大変な歓迎と接待に唯々敬服するのみであった。それにしても若い才女の市長さんには驚嘆した。休暇中なのに教会のご案内など心温まる接待にありがたく感謝した。

公園の中心部に位置する日本庭園、多々良会長さんや山口市造園協会のみなさんの汗の結晶で見事なものであった。山・パ友好に貢献されたことを賞賛する。

牛追いやフラメンコ踊りの見物・闘牛の観戦そしてハビエル城の見学と良い思い出となる。

苦言を1点、台地や高地をなぜあれほどに耕地にしなければいけないのか、緑の高地の復活を望む。地球温暖化防止のためにも。

最後に男性の最高齢者ということで皆様に度々お声をかけていただいたことに感謝申し上げる。



旅行記

伊藤 謙二

スペインは一度行きたかった国。パンプローナ市との姉妹締結25周年記念訪問団に喜んで参加した。町はサン・フェルミン祭の最中で世界的に有名な牛追いを見ることができた。ヘミングウェイの書いた「日はまた昇る」の文中描写そのままの感動の体験だった。

公式行事を終え帰国する公式訪問団と別れて、我々市民訪問団はアンダルシア地方のアルハンブラ宮殿に向かう。40度を越す暑さの中、宮殿内を歩く二時間近いコースも湿度が低いので快適に見学できた。反面、スペインは過去50年で最悪の干ばつに見舞われており、4つ星クラスのホテルでもシャワーを浴びていると突然シュワーという音とともに水が出なくなることもあった。国土の三分の二で節水を実施しており、農業損失も甚大になっているそうだ。最終日は自然豊かなリゾート地ネルハに泊まる。ホテルの前は地中海海岸の海水浴。海の向こうはアフリカ大陸というところで泳ぐのは壮快だった。



赤の陣羽織でいざパンプローナへ！！

入 江 幸 江

姉妹都市締結25周年記念訪問団に参加し、暑かったけれど楽しい旅でした。

公式訪問団と同じ行動を取る事となっていたので、サンフェルミン祭で是非山口をPRしてきてほしいという陣羽織の提案は、見事ヒットしました。

サンフェルミン祭には市民はもとより、このお祭りに参加している方々は白い服装に赤いスカーフと赤のサッシュベルトなので、誰が誰だか解り



ません。しかし、目立つ赤の陣羽織は山口の訪問団だとすぐわかり、結構話題になっていたようです。私たちにとっては仲間を見つける良い目印でした。市長舎のバルコニーから、牛追いを見た後、市内見学（自由行動）をしていたとき、ヒガンテス（巨人人形）のパレードに出会い、見ていると、山口県立大学教授の安溪遊地・貴子夫妻が歩いておられるではありませんか。これにはお互いびっくり致しました。今年の5月から半年スペインへ行かれていると言うことは聞いておりましたが、このサンフェルミン祭の人混みの中で、偶然にも出会うとは考えてもいないことでした。とにかく懐かしくうれしかったです。こんなこともあるのですね。

スペインと言えば闘牛とフラメンコどちらも前節が良かったので楽しむことが出来ました。

この度の参加者は公式訪問団と一般の方々総勢31名でした。両親が訪れたパンプローナ市を見てみたいという思いで参加を致しましたが、15周年記念でパンプローナ市に山口庭園を造り、その後も造園組合の方々は公式訪問の度に、庭木の手入れをされておられます。また、以前パンプローナに移住されておられました王子夫妻のご尽力も忘れてはならないことだと思っています。このように市民の皆様の活動に支えられ、交流が続いているのだと改めて感じました。

姉妹都市締結25周年市民訪問団に参加して

山口市造園協会 岡 本 薫

①姉妹都市締結15周年記念事業で「パルケ・デ・山口」の建設事業に参加して以来今回で4回目。前回平成15年11月（山口県とナバラ州の縁組）以来1年8ヶ月ぶりの訪問であった。

②今回の記念事業の一つとして公園樹木の共同剪定、整備作業があり参加した。記念植樹祭の前日も、除草、掃除作業をする人を見かけ、草花や低木の補植もされており、パンプローナ市も気をつけておられた様子。

③以下は、公園管理責任者カルロス氏（公園建設当時の設計施工の担当で9年ぶりの再会）とのやりとりである。



作業前

岡 本「日本庭園の特徴である滝、流れ、池が樹々の隙間から見える様に少し剪定したい。」

カルロス「この公園は、他の公園に比べて特に気をつけて管理している。剪定の時期も過ぎて
いるし、あまり枝等を切らないで。」

岡 本「一寸おれがやってみる。お前は、その園路から池のほうを眺めて見て・・・」

カルロス「OK!好きな様にしてくれ!」

作業後

カルロス「お疲れさん!今日の昼食の予定は?」

岡 本「それがまだ。その辺で適当に。」

カルロス「それなら、お前等は減多に口に出来ないものをご馳走するよ!調度7日目で食べ頃だ
ろう!」

という訳で、サンフェルミン初日の牛追い行事に出走した牛を食べる事に。(写真 カルロス
氏:左側の黒シャツ、ヒゲの人)

終了後

カルロス「今後は、今日一緒に剪定したことを思い出してうまく剪定するよ!」

岡 本「あまり、上手になると、おれ達の出番は?」

以上

山口市・パンプローナ姉妹都市締結25周年記念訪問

岡 部 敏 雄

山口公園の樹木が荒れ放題になっているとの投書が、市にあった事を聞き、内心残念で心配しておりましたが、この度の訪問団に公園の樹木剪定の任務を受けて参加させて頂き、4度目のパンプローナ訪問となりました。

公園の樹木は岩組みが見えるよう、要所の木を枝透かしする程度で済み、全体的によく管理されており、安心しました。

私の念願であったサン・フェルミン祭の牛追いを
見ることが出来て感動し、変わらぬ風景と町の雰囲気
に癒され山口に帰って来ましたが、この暑さと時間
に追われる生活で早くも現実の厳しさに戻され、夜
の湯田で飲む酒で癒される今日この頃です。



今、目の前に写真と旅のパンフレットそしてパンプローナ市から頂いたサン・フェルミン祭の衣装と陣羽織があり、十日間の旅を振り返っております。この旅にお誘いいただいた時、体力、気力に自信がなくて、ついて行けるかどうか不安でしたが、見るもの聞くものすべて目を見張ることばかりでした。スペインの数々の世界文化遺産を見る時、築いてこられた民族の息づかいが感じられるような気がして本当にすばらしいものばかりでした。そのスペインのパンプローナ市に山口公園があり、市民に親しまれていることを目の当りにし、感激致しました。そして両市のために努力してこられた方々のことを思いました。一緒に旅させていただいた皆様との思い出、暑いちょっぴりきつい、そして楽しい旅となりました。暖かく受け入れていただいたパンプローナの皆様、そしてこの旅と一緒に参加したすべての皆様に感謝致します。



山口ナバラの会副会長 小 林 真 人

今、山口市とパンプローナ市との姉妹都市締結記念式典へ出席した折り、サビエル城前で撮った記念写真を見えています。

今回の訪問の写真とは風景は大きな違いはありません。しかし、写っている人たちの中で当時、急遽団長をつとめることになった中野市議会議員、後に市長をつとめた小林総務部長、八木商工会議所会頭夫人、水野文雄同顧問、通訳をつとめたデ・ルナ神父などの方々はもう鬼籍に入られています。改めて25年という歳月の長さを実感しました。



当時、一緒に取材に行った林カメラマンと「将来ここへはもう2度と来ることはないだろう」と、この町を後にしたのを覚えています。

ところが、山口ナバラの会のお世話をしている関係で、今回の訪問団のパンプローナ市以後の日程計画を依頼されることに。小生は、迷わず一番スペインらしい南スペイン・アンダルシア地方を選びました。

今回は、季節的に旅行費用が一番高額な時期であることから、なるべく安く出来るようにと旅行業4社から見積もりを取りました。

しかし、パンプローナ市はサンフェルミン祭りのため、この時期世界各国から観光客がこの町を訪れることからホテル確保が難しく、内2社が脱落。結局ヨーロッパ最大級のツアー会社と提携したサンデン旅行の石田さんをお願いすることにいたしました。

石田さんとは、今の会社とは違うものの、1980年2月の調印式の際にも同行して頂いたというのも何かの因縁を感じます。

団員の募集をすることになって関係者は、全体で20人も集まればいいのでは、との予想。しかし、募集をはじめる前からかなりの希望者があり、最終的には目標を上回る30人を超す希望者があり、募集のために作成したチラシもあまり必要がないくらいで、うれしい悲鳴となりました。

フェスタはやはり爆発した

7月6日、日曜日の正午、フェスタは爆発した。そう表現する以外、形容のしようがない。

ノーベル賞作家ヘミングウェイの小説「日はまた昇る」の一節です。

小生が25年前に訪れたのは2月。ひっそりとしたたたずまいの町の印象しかありませんでしたが、今回は祭りの最終日。町は熱気に包まれていました。

県立大の水谷先生がデザインされた派手な陣羽織も、最初少々抵抗があったのですが、現地では大もて。450年前、当時の山口の人たちから見れば奇抜な格好に見えたであろうサビエルの服装に対する視線が、同じように今パンプローナ市民から小生たちに向けられました。しかし、時代は変わって現地の人たちの格好の被写体に。

前回の訪問時とは季節も違い、今回は世界的に有名な祭りの期間中とあって華やかさは比較になりません。その歓迎ぶりは25年前の姉妹都市締結時と変わらず、感激いっぱいでした。この間、山口公園の完成、図書館の山口コーナーの充実、人的交流、また2003年には山口県とナバラ州が姉妹縁組を締結したことで、より一層その絆が強まった気がします。

8月初旬、パンプローナ市からナバラ州立音楽院交響オーケストラが来山し、山口市民館がほぼ満席になるほどの聴衆で埋まり、立派な両市の国際交流が出来たのではと思いました。

魅惑のアンダルシア地方

残念ながらひまわりは最盛期を過ぎていましたが、世界の半分近くを生産するという見渡す限りのオリーブ畑、どこまでも続くまっすぐな高速道路。40度を超す灼熱の太陽が照りつける中、次々に現れる世界遺産の数々。1人の落伍者もなく、全員が予定通りの行程を終えることが出来たのはなによりでした。

ミハスでは、海峡の向こうはもうアフリカ大陸と聞くと、はるばる来たものだ感激したものです。それに、アンダルシア地方は名曲の舞台。一度この目で見たいと思っていました。「アンダルシア」「アランフェス協奏曲」「哀愁のコルドバ」「セビリアの理髪師」「グラナダ」「アルハンブラの思い出」などは日本でもよく知られています。

中でもセビリアでは「カルメン」の舞台となった建物をこの目で見て音楽好きの小生にとって感激が新たに沸いてきました。

ガイドの佐々木さんによれば、年間5,000万人の観光客が世界各地から訪れるそうですが、うち日本人はわずか20万人だとか。

どこの観光地を訪れても日本人ばかり・・・も困りますが、もう少し日本からも観光客が訪れてスペインを理解して欲しいものです。

短期間ではありましたが、かいま見たかつて世界へ君臨したスペインの光と影。

あこがれの地を訪問して小生にとって忘れがたい旅となりました。

参加された皆さんに「G r a c i a s !」。ありがとうございました。

スペイン旅行

駒 井 末 次

朝の早くから牛追い祭りに燃えるパンプローナ市民の熱気・・・。
そして闘牛場内の歓声、スペインの雄大な平原、世界文化遺産のアルハンブラ内の広さ。
スペイン人の陽気さに、私は心に残るものがありました。



行って来ました スペインへ

佐 藤 宣 子

行ってみました、私時差ボケなの。出発直前まで仕事と雑用でゆっくり地図も広げられませんでした。今改めて目を通すのに、よくもこんな地の果てまで行けたものだと言きさんに感謝しています。また、サビエルが日本にたどり着くまでの年月はいかばかりだったのかと、世界の広さも知りました。



公式行事も一市民として出席させていただきました。いい経験でしたが、でもちょっと、無名の私がここにすわっていいのかナーと私らしくもなく謙遜もしてみました。

さすがは世界文化遺産、イスラム寺院やアルファンブラ宮殿など贅の限りをつくした見事な彫刻。また、幾多の犠牲のもとに作り上げられたそのすばらしい芸術を見上げながら貧富の差を感じ、とりわけ自分はやっぱり奴隷のほうかな・・・と幼稚なことも感じてみました。

アンダルシアの白い村は本やテレビで目にしたことがあります。真にその通りで壁が白い訳もわかりました。フォークとナイフ、最初はリッチな気分を味わっていましたが、一週間もすればもうパンは結構・・・やはり日本食は繊細で見た目といい、すばらしいものがあると外に出てみて感じました。

スペインも世界の一部ですが、飛行機の窓から見た限りなく続く平原（シベリア平原？）で地球の半分を見た気がしました。

出発までの眠れない日々はどこにやら、なにはともあれ“案ずるより生むが安し”今の私の心境にピッタリ！

2005年7月12日に新国際空港成田を午後1時20分に出発、イギリスのヒースロー空港を経由してスペインのマドリードに入国しました。マドリードからパンプローナへ、スペシャルランチ付の新幹線は快適な乗り心地であり、車窓からの景観は山がなくて広大な田園にはオリーブ、ぶどう、とうもろこし、ひまわり等が見渡す限り栽培され、その耕地面積は日本の5倍、スペイン国民の食を充分満たした上で輸出もしている。多くの食材を輸入に頼る日本の現状と対照的でした。



パンプローナの市長は美人で知的でスタイル抜群の女性であり、また市をあげての心温まる特別な歓迎ぶりに感動しました。

「牛追い祭り」「闘牛」の観戦に於ては、異文化の違いに戸惑いを感じながらも楽しむことができたし、500年前のサビエルに思いを馳せながら生誕地のハビエル城を見学し、焼失した山口のサビエル教会を懐かしく思いおこしました。

建築材が石であり、また大切に保存修復され今日に至った遺産が多く、見るものすべて歴史の流れと重厚さを感じることができました。

南の方へ下ると一般の住宅は、白と淡くやさしい感じのオレンジ色の2色。

もっと南のグラナダやネルハは白一色の建物、樹木のグリーン、地中海のブルーにコントラストが美しく映えて輝く日の出を見ながら思い出多いスペインの旅を終えました。

パンプローナ市の山口公園を見学することも楽しみのひとつでした。

美しい庭園は山口県人の心意気がスペインの人々に伝わっていると思いました。サビエルがもしこの事を知ったらどんなに喜ぶだろうと想像し、ひとり胸がわくわくしました。

パンプローナ市訪問団に参加して

竹下 隆司

長い飛行機の旅、「お疲れさま」と言いたい程長かったですね。

それでも、飛行機の中より時々眼下に見えるロシア大陸のさまざまな風景、湿地帯、大きく曲がって流れる大河、そして運よく氷河もみられ感動です。

パンプローナの山口公園を訪れるのは、九年前の完成式以来です。

完成当時の公園は、樹木も細く植木がまばらにある程度でしたので、早く大きくなって、庭を彩って欲しいと願っていました。



今回、山口公園を目の前にして、滝の周辺そして池廻りの樹木等よく繁り、良く成長したなと感心した程です。

芝生の色も鮮やかな緑色で、木陰で憩う市民の姿を見て嬉しく思いました。

町の様子、特に赤レンガや石を使った建築はとても落ち着いた雰囲気、教会など十四世紀頃の建物が現在も使われている様は、本当に圧倒されます。

また、路地の至る所まで石畳が敷き詰められ、各々の窓には花が飾られて道行く人々を楽しませてくれています。

町を大切にしている人々の気持ちが伝わってくるようでした。

今回の旅で、パンブローナ市長ヨランダ様を始め皆様の温かいもてなしに感謝しております。又機会がありましたら訪れたいものです。

熱くて暑いスペインを訪問して

田 中 和 枝

姉妹都市パンブローナへ

パンブローナはサン・フェルミン祭の真最中に行き交う人々は赤いスカーフを身につけ祭りへの情熱を現し、私たちにも、早速赤いスカーフとサッシュがプレゼントされました。

7月14日はサン・フェルミン祭最終日！

私たちは頂いた赤いスカーフとサッシュを身につけお祭へ！！

最終日のハイライト、エンシュロ（牛追い）は市長のご配慮で市庁舎のバルコニーから見物。牛の闘牛場への長い誘導路は人、人、人・・・。

やがて走り込んできた牛の一団と人々が入り交じり怒濤のように駆け抜け、その興奮と熱気は観ている私たちにもまでも伝染し、一日中パンブローナの人達と一体となって祭りに興じ浸った。

私は町でかわいい少女にキスのプレゼントをされ大感激！

一連の交流行事の中、市長のさりげなく暖かい心配り（市職員への当てつけ）のおかげで市民訪問団としての国際交流が出来たように思います。

南スペイン・アンダルシアへ

見物の圧巻は、コルドバのメスキータとグラナダのアルハンブラ宮殿。

私は宮殿の壮大さもさることながら、メスキータに深く心を奪われた。メスキータに入った瞬間、身の引き締まる思いをしました。イスラム教とキリスト教が融合したこの建物に、スペイン人のおおらかさと不思議さを見た思いです。

私はイスラム教の偉大な文化・歴史の一端に触れる事が出来、新しい発見の連続でした。現地ガイドの佐々木さんのお話はすばらしく、帰国後、ちょっぴり本を読んでみようと思いました。

最後に訪れた地中海に面したホテルと白い村（フリヒリアナ）は思わずにっこり心穏やかになるところでした。良かった！

10日間のスペイン旅行は、個性あふれるすばらしい人々に恵まれ、新しい思い出をたくさん頂きました。ありがとうございました。みなさんへ感謝、感謝です。



初めてのスペインは、何も彼も新鮮で驚きの連続でした。やまぐち公園の桜の植樹、やまぐち図書館、牛追い祭、巨人の行列、闘牛のあわれ、フラメンコ、サラサーテと列挙すれば印象の強かった時と場所は限りない程です。

中でも修理工事中のハビエル城、最終日の地中海、夜のプールは忘れられません。同行の「さくら」共々婆々「百合」ご迷惑をかけました。お許し下さい。でもお蔭様でとても楽しい旅でした。心より御礼申し上げます。



今回の旅で最も心に残ったあれこれを二つ三つ書き添えます。

八日目、公式行事も無事終了した安心感と少々の疲労感も萌し始めた頃。コルドバ市内のユダヤ人街を見学しました。カトリック王から追放令が出されるまで多くのユダヤ人が住んでいたという石畳の路地の町です。太陽がまぶしく降りそそぎます。白い漆喰の壁に塗り籠められた家並みの小さな窓。壁の一部が剥ぎ取られ、下の壁土が茶色に見える部分がありました。ガイドさんが「手を当ててみて下さい」一同次々に掌を当て「ほうっ」と驚きの声。茶色は熱く、白色はひんやり。漆喰が熱を遮ぎって室内の温度が調節されるというわけです。灼熱の陽光の下、人間の生きる為の智慧に脱帽。ほの暗い家の中に、ひっそりと息をひそめる白昼の人々の生活を思い描いたりしました。

不意にふるさとの田園風景に点在する土蔵の白壁が浮び上がりました。多分同じような考えから作られた米蔵だったのだろうと、感慨深く湿った土の匂いを思い出したのです。スペインと日本。遠く離れながら、どこかに共通した人間の営み。少し感傷的になったのは旅愁からだったのでしょうか。

九日目、コルドバからアンダルシア平原を、バスで走りました。見渡す限りオリーブ畑。低い枝がこんもりと盛り上り連なっています。赤茶けて乾燥した土は痩せて、他の植物は育たないとか。オリーブの木の実に寄せるロマンチックな思いは、こんな苛酷な土壌までには思い及びませんでした。それでも人間はそこで生きて行く。……など、とても哲学的になったのも、バスの中の心地良さからだったのでしょうか。前後左右のお友達の皆さん方から、飴やクッキーなどお菓子が廻わってきて楽しい会話と居眠りが交互におとずれました。

十日目、最終のネルハの夜。コスタ・デル・ソル（太陽海岸）の岸边をはだして歩きました。砂と石が波に洗われて旅の終りの音を奏でています。次々に思いがよぎっていきます。

サラサーテのヴァイオリンを手にした像が闘牛場に近い公園に立っていて、チゴイネルワイゼンの作曲の原点は、このスペインのまぶしい光だったのだと納得したこと。

ヘミングウェイは、アメリカから何を求めてスペインへ渡ったのだろうか。「老人と海」「武器よさらば」そして「日はまた昇る」の作品の根源。彼がワインに酔いしれた酒場の前の祭りの賑わい。人間の強さと弱さを掻きまぜて陽の下にさらすスペイン。

オリーブ畑の土の色と同じ色をしたハビエル城を出て、日本までやってきたサビエルと、少しでも思いを重ねることが出来ました。感謝。

“百聞は一見にしかず” 毎日の盛りだくさんの観光は、城壁、町の作り、道の敷石の一つまで“そうだったのか”と、西洋史とリベリア半島の地理の授業が体感出来た有意義な旅でした。

一番楽しかった事は、地中海で泳げた事です。海底は美しい丸い石。そして塩分の強い海水。私は今まで、色々な海で泳いだ事があります。富海の瀬戸内海、菊ヶ浜の日本海、ワイキキの太平洋、ブラジルサントスの大西洋。砂浜の砂は、どこも少しずつ違いましたが、海水濃度がこんなに違った海は初めてでした。海水に対する固定概念も崩す事が出来、この旅は、私の脳に素晴らしい刺激とショックも与えてくれました。

最後に一こと。みなさん、大変お世話になりました。お蔭様で良い事をたくさん学びました。



山口に住み働いていて、今までは仕事上での関係でしかナバラの会のことやパンプローナを知ることがなかったのですが、今回の旅行に参加して改めて山口との交流や親睦の認識が出来ました。

旅行に行くことになった時は行先の場所もあやふやで、すぐにガイドブックを買い確かめたぐらいでしたから、マドリッドからの列車での車窓や、パンプローナを中心部の街並、朝早くからの牛追い祭りや、闘牛の見学、一晩中飲みあかしている人達に圧倒されたという4日間でした。



また駅での出迎えやレセプション、昼夜の食事会等での歓迎ぶりには山口との良い関係が、サビエルのころより現在まで継いでいることを本当に知ることが出来ました。

今度パンプローナの方々が来られる際には、今まで以上に歓迎をしなければという思いです。

またぜひスペイン・パンプローナに行きたくなるような旅行でした。ご一緒いただいた皆様ありがとうございました。

また行ってみたい国「スペイン」

堀 俊 夫

この度、私は姉妹都市締結25周年記念訪問団には、3つの目的があって参加しました。

1. 山口市・パンプローナ市姉妹都市提携25周年記念公式セレモニーという、両市の歴史の1ページに立ち合うこと。
2. ユネスコの世界文化遺産に指定されている街、トレド、グラナダのアルハンブラ宮殿とヘネラリフェ宮苑、コルドバのメスキータを自分の眼で見ること。
3. サン・フェルミン祭のハイライトである「牛追い」の迫力を体感すること。

いずれも感動と歴史・文化に魅了されるものであり、所期の目的は達成されたと思います。

当初、今回の旅は「姉妹都市締結25周年記念訪問団」という少し堅苦しい名称が付いており、参加することに“ためらい”がありました。

しかし、両市の姉妹都市提携を更に深めるためには、山口市民の1人でも多くがスペインに行くことにより、相手を知ること、交流を深めることが、姉妹都市提携の基本であり、発展の原動力になるものと思い、参加致しました。

また、参加したことにより、新たに市民の方々と親しく話をする機会を得ることが出来たことは、私にとって更に意義のある旅となりました。

今回のスペイン訪問にあたり、旅行の企画・実施等に参画された多くの方々に対し、感謝申し上げます。



山口市パンプローナ市姉妹都市25周年に参加して

松 崎 カヨノ

マドリッドにおり立った時の心の躍動、家族への一瞬の感謝の気持。

パンプローナ市の心のこもった御招待。

山口市の友情、参加出来たことの幸せ。

山口公園のゆったりとした美しさ、山口のみな様のお世話に頭の下る思いでした。

スペイン最後の夜、地中海でお友達と服の裾の濡れるのも忘れてはしゃいだこと、フォークダンスを楽しんだこと、まんまるお月様も満足そうに微笑んでいました。

みな様お世話になりました。

有難度うございました。



思いがけない緑の糸に手繰られて、この度「山口市とパンプローナ市の姉妹都市締結25周年」の旅に参加することが出来ました。

スペイン・パンプローナの牛追い祭りを見ることは、かねてから私の念願で、白シャツ、白ズボン、赤いスカーフと腰布をつけた人々が沿道を埋めつくし、牛と男たちが闘牛場までの800mを走り抜ける様子には、唯々、目を瞠るばかり。この光景を私達は、一番よく見えるバルコニーから見学することができ大満足でした。しかし、期待していた闘牛観戦では、場内のうだるような暑さと熱気に加えて、旅の疲れから半ば夢心地となり周りの興奮に同調できず残念。



サビエルの生まれ育ったハビエル城では、今さらながらイエズス会士として、遠く山口の地まで伝道に来たザビエルの偉業と苦勞を偲ぶことができました。

さて、興奮と感動のナバラ州をあとにした我々は、スペインを南下、まず、マドリッドでフラメンコショー、プラド美術館を鑑賞、途中、ドン・キホーテゆかりの地を訪ね、ついにかつてのイスラム文化の繁栄を遺すアンダルシアへ至りました。コルドバでは、メスキータ内部のアーチの美しさにしばし見とれ、セビーリヤでは、70mある風見の塔の展望台まで、歩いて上りました。

グラナダでは、イスラム最後の牙城アルハンブラ宮殿の広大な敷地を歩いて観光、この日の気温は42度ありバスを待つ間に飲んだ水のおいしかったこと。

40度を越す気温の中、早朝から夜遅くまで、盛り沢山のスケジュールでしたが、全員元気に観光ができました。

たしかに、私達日本人には、神事や神への供儀に結びついた「牛追い」祭りや闘牛の精神を理解するのは難しいでしょう。またそうした祭りを崇高な芸術と考えると、今でもなおバスク人としての誇りを強く持つ人々の心性に共鳴することも、到底できないことでしょう。

しかしながら、今回、パンプローナ市、およびナバラ州の歓迎式典や数々のイベントに参加し、「牛追い」という土着の伝統的な祭りの雰囲気にも触れることができました。普通の観光旅行では、おそらく味わえなかっただろう貴重な体験でした。

おわりに、この度の旅を企画されました方々ならびに現地のガイドさんに、深く感謝いたします。

山 野 タ エ

大きな黄金色に輝く向日葵が斜面いっぱいに咲き、どこまでつづくのかと思うほど、バスの窓から見入ってしまいました。

山口では経験出来ない暑い太陽が照りつけ、美しい歴史の町並みも見たいし、一刻も早く日陰に入り込みたいし、思い出はつきません。

このスペインでも環境を大切にされている様子を、どこの町でも感じる事ができましたが、もっ

とも驚いたのは、古い町並みはとても道路が狭く曲がり角が多く、ゴミ収集車が入れなくなっていて、そこで広い通りに面したところには各種分別されたコンテナと生ゴミ用ダッシュボードがありいつでも捨てられるようになっているのには本当に感動しました。この生ゴミがどこまで運ばれていくのでしょうかと・・・。

スペインの古き良き町並みが今も、そしてこれからも世界中の人々の心がけ一つでいつまでも美しく保存されつづけられるのを願ってやみません。

最後の町ネルハのホテルでみた大きなお月様と水平線が今も心に残っています。お世話になりました。



「オラ！コモエスタ！」

防府市 安田 武勝・雅子

暑かったです！しかし、帰国後の日本はもっと暑い！

情熱の国スペイン旅行、それもスペインの真ん中を縦断。パンプローナ、マドリッド、そしてアンダルシア地方コルドバ、セビリア、マラガ。

オペラを始めとする楽曲で知られるアンダルシア・グラナダ・セビリア・アルハンブラ等は耳慣れた名前である。そう言えばサラサーテの像も、カルメンが働いていたというタバコ工場もあった。女好きのドンファンもあったなあ。

さらには本場のエンシェロ（牛追い）や闘牛、フラメンコ。

今回の訪問団に参加したお蔭で、パンプローナ市役所テラスからエンシェロを見学できた事は圧巻であった。地元の人でも市役所テラスからの牛追い見物は難しいという。

牛追い祭りは、全コースでもあつという間の4分間、体重500キロの牛が怒濤を立てて駆け抜ける。周囲は赤と白の群衆で大層な賑わい、誠に華やかである。

8日間ぶつ通しでお祭りに明け暮れる民衆の情熱、エネルギーはどこから来るのだろうか？その中一緒に参加できる貴重な経験をさせていただいた。また、国技の闘牛も見物できた！

それから、スペインに莫大な富をもたらしたコロンブスの像や4人の兵士に担がれた棺。

そして感じた文化の違い、価値観の違い。

此処はやはり西洋である、東洋の思想や物差しでは計り知れないモノがある。キリスト教文化やイスラム教文化の底知れぬ怖さを感じたのは自分だけだろうか？

言葉を換えて言えば騎馬民族と農耕民族の違い、肉食動物と草食動物の違いだろうか。

大聖堂の床下はお墓、皆その上を土足で歩いて平気である。一寸理解しがたいがこれが文化の違いだろうか！文化の違いというものを心底痛感させられた。



このような体験が出来たのも良き企画、良き添乗員、良きガイドに恵まれ何よりも良き人々と一緒に旅行できたことであり、何よりの収穫であった。また、夫婦で参加させて頂いた楽しい旅であったことで感謝一杯です。

パンプローナ25周年訪問に参加して

冷 泉 智 子

行くまでは体調や家の事等色々心配で迷ったが
思いきって行くことにしました。

私の義姉は熱心なカトリック信者であった。厳寒の日も灼熱の日もミサに行っていた事を思い出す。今フランシスコ・サビエル生誕の地ハビエル城を見学し心を新にした。サビエルが450有余年前遙々日本に布教に来た事大変だったと思う。私は姉に代って礼拝して来た。数々の宮殿や大聖堂に目を見張り豪華建築に圧倒された。サンフェル



ミン祭に町中あげて老いも若きも赤ちゃん迄赤の布を纏い祭に参じ飲んで踊って底抜け明るく鬱憤も晴れそうだった。ワインセラーレストランで日本人とパンプローナ人とで結婚したという人に出会った。日本との掛け橋になって頂きたい。楽しい旅を終え皆様大変お世話になり有難うございました。

「行けど行けどオリーブ畑 連らなりて

広大な地のスペインの旅」

石 田 恭 嗣

25年前

1980年2月19日に山口市とスペイン・パンプローナ市の姉妹都市調印式に臨むため、底冷えのする成田空港をスイス航空で飛び立ち、翌朝チューリヒに到着。チューリヒからマドリッド行きに乗り換えてようやくスペインの地へ。翌日未知の土地パンプローナへ。到着時の印象は真冬のせいか、薄汚れた空と灰色の建物が目に飛び込みナポレオンの言葉（ピレネを越えたら・・・）を思い出した。バスク人などを弾圧し、強権政治を行っていたフランコが1975年に没して2年後に新憲法が制定され、バスクの自治権が承認されたばかりのバスク州、州都パンプローナはこのほか治安が悪いよう。訪問団一行が乗ったバスの前後を完全武装の兵士を乗せた装甲車で挟み、警察車両が左右に随行し物々しい警戒態勢が敷かれていた。バスクの自治権が承認されたことでバスク独立運動が加速し、州政府要人への襲撃が頻発しているための措置とのこと。調印式は市庁舎で厳粛に執り行われ、無事終了。この時25周年記念訪問団が組織されることを想像出来た関係者が私を



含め何人いただろうか。パンプローナを離れる日、この地には再度訪れることはあるまいと自分自身に言い聞かせ、マドリッド行きの列車に乗り込んだ。

25年後まで

仕事柄、フランスやスペインに行くことが少なからずあり、日程を作る際パンプローナの近くを通る時、たとえこの場所がピレネー山麓のフランス側であっても、パンプローナに立ち寄る日程が出来上がってしまう。結局調印式を含め6回もこの土地を訪れることに。

25年後

2005年7月11日成田空港から英国航空でロンドンへ。ロンドンで発生した無差別爆弾テロの余韻も覚めやらぬ緊張の中、ヒースロー空港に降り立った。乗り継ぎの遅れも手伝い、日付も変わろうとするマドリッド空港に到着。2004年3月11日に発生したマドリッド・アトーチャ駅での列車爆破テロの現場から、物々しい保安検査を受けて新型タルゴ特急に乗り込み一路パンプローナ駅へ。25年前とは違い真夏の太陽が照りつけ、パンプローナ市は明るく活気に満ちていた。サンフェルミン祭のハイライト・エンシュロも堪能し、25周年記念式典、山口公園での記念植樹と公式日程も朝から深夜まで訪問団は精力的にこなし、記念行事も無事終了。

25年間のパンプローナ市の変貌には目を見張るばかり。郊外に街は拡大し、企業進出も活発で、街も綺麗になり、無数の風力発電用風車が静かに回り、人々は裕福になった。

25年目の銀婚式を迎えられたのも、ひとえに姉妹都市提携を存続するという強固な意志と、労を惜みず献身的な働きをされた両市民の一途な想いがあったからこそ成し得られた結果である。30周年に向け絶対に自慢しても良いと思う。

パンプローナのキャラメル騒動

被害者はただ1人。帰国後、被害者発生の話は聞こえてこない。風の噂では唯一の被害者は未だ歯科医院に通院し、この出来事に懲りて徹底的に歯の治療を行っているらしい。善意のキャラメル提供者の方には大変ご迷惑をお掛け致しました。

山口市・パンプローナ市公式訪問団 旅行記

サンデン旅行山口支店 添乗員 西 山 和 則

公式訪問団6名様の添乗員として8日間の同行が決定しましたが、一般のツアーでこのような訪問団へ同行する事はあまりなく、又スペインへは初めての訪問だった為、どのような旅行になるのか期待と不安の中で出発する事となりました。

成田空港からロンドンを経由しマドリッドへ。真夏のスペインはとても暑いのですが、到着が深夜だった為、あまり暑くなくサラッとした心地よさを感じました。出迎えて頂いた現地ガイドの



佐々木さんはスペインの他、ヨーロッパを大変良く勉強しておられ、話し方にもユーモアがあり、大変楽しい方でした。2日目、トレドを観光し午後からパンプローナまで列車の旅。マドリッド駅でのVIPルームでは飲物やつまみがサービスされており、お客様には好評だったように思います。

パンプローナ市到着後、パンプローナ市長他関係者の方々の手厚い歓迎があり、サンフェルミン祭の牛追いを市庁舎から高見の見物をし、市の歓迎式典やナバラ州政府歓迎式典にも参加し、普段では到底体験出来るものではなく、このような機会を与えて下さった皆様方には大変感謝しております。

お祭り期間中で街は人々でごった返していましたが、パンプローナ市の印象は、普段は静かできれいな街だと思います。人々のはのんびりしてフレンドリーな方が多いと感じました。プライベートでもう一度訪問してみたいと考えております。

最終日はマドリッドのプラド美術館を訪れました。色々な絵画を鑑賞し、ヨーロッパの人々の長い歴史や文化の素晴らしさを肌で感じる事ができましたが、現地ガイドさんのこと細かな説明にもかかわらず、私自身ヨーロッパの歴史を勉強不足でわからない事もあり、もっと勉強して訪問すべきだったと反省しております。

今回の旅行へ参加して下さいました皆様、添乗員としてこのような機会を与えて下さった皆様、この旅行の為に尽力頂いた全ての方々に感謝いたします。

思い出アラカルト



出発式（成田空港）



成田から12時間20分戒厳令のロンドン到着
（ヒースロー空港）



〔世界遺産〕トレド市全景、中央はカデドラン



トレド市内を散策



新型タルゴ特急「アルタリア号」でパンブローナへ



「アルタリア」の一等車の乗りごちは



パンブローナ駅に到着 ヨランダ市長が一行を迎え



成田から16時間旅の疲れも忘れたひととき



水谷先生デザインの陣羽織は市民の注目の的に



牛追いまつりのTVに見入る訪問団



ヘミングウェイもよく訪れた
「カフェ・イルーニャ」で



牛追いまつりを見学後ほっとひととき
(マイヨール広場)



市役所前に集まったまつりの参加者



市役所へ向う巨人たち



ヒガンテス・巨人の踊り
ユネスコ「無形文化遺産」に指定される



闘牛場・あの残酷さは参加者には
どうも理解出来ない



生誕500年祭に向けて工事が進むサビエル城



サビエル城の説明を受ける訪問団



40度を超す暑さの中オリテ城見学



地元オリテ市の女性市長さんも歓迎のため来訪



オリテ城での昼食
ワイン・ビール・水がほぼ同じ値段



山口市からは大内塗りの盆を贈る
(パンプローナ市歓迎式典)



歓迎式典には正装で出席



地元合唱団の「さくらさくら」に
訪問団の心が和む



山口ナバラの会からは風呂敷を贈る



記念植樹をする 武田団長とヨランダ市長



山口市民から贈られたこいのぼり



25本目のサクラを植える多々良会長



市民の憩いの場となった山口公園



多々良会長の説明を聞く訪問団



植樹祭には楽隊もかけつけ盛り上げてくれる



灼熱の太陽の下、強行スケジュールに
木陰で疲れを癒す



ヨランダ市長へ折り鶴を渡す入江市議
(OTAZU ワイナリーで)



ヨランダ市長主催晩餐会
(OTAZU ワイナリーで)



山口市から「坊ちゃん」のスペイン語版
などを贈る (山口図書館)



図書館員も特製法被で歓迎



ナバラ州政府主催歓迎式



サンス首相には山口ナバラの会から風呂敷を贈る



サンス・ナバラ州首相と訪問団との記念撮影



ヨランダ市長から団員一人一人に握手でお別れ



ヨランダ市長からお別れの握手
美女に弱い「きせん」のお父さん



マドリードへ移動 今日中は37度



マドリードの夜はフラメンコを堪能



訪問団は眠気も忘れて全員盛り上げる



有名な「はだかのマハ」「着衣のマハ」
(プラド美術館)



首都マドリード市内



ドンキホーテの舞台 ラ・マンチャ地方の
中心コンスエグラ村



ドンキホーテゆかりの旅籠で



〔世界遺産〕メスキータ（コルドバ）



〔世界遺産〕メスキータ内部
（TV画面から）



〔世界遺産〕ユダヤ人街歴史地区を歩く
（コルドバ）



〔世界遺産〕ユダヤ人街歴史地区で（コルドバ）



歌劇「カルメン」の舞台 たばこ工場
（セビーリア）



〔世界遺産〕世界第3位の規模を誇るカテドラル
（セビーリア）



〔世界遺産〕ビルダの塔



王宮の前で



これがスペイン料理の代表「パエリア」
ちょっと塩辛かった



今日はちょっと涼しい…でも40度



〔世界遺産〕 アルファンブラ宮殿全景



〔世界遺産〕 アルファンブラ宮殿で



おなじみの風景「♪アルファンブラの思い出」
が聞こえてきそう



美女と宮殿の庭が良く似合う！



今夜がスペイン最後の夜（ネルハ）



佐々木郁夫さん全行程すばらしいガイド
ありがとうございました

vecinos
pamplona

EN ESTA SECCIÓN

Vista aérea de Pamplona	19
Refugio en Irujo	21
Cartel turístico de Tarazona	23
Sede de la Mancomunidad en Tudela	24



Japoneses y distintas autoridades de Pamplona se animaron a plantar cerezos. FOTO: J. L. GARCÍA

Plantación de
cinco cerezos

Después de conmemorar el 25 aniversario en la Ciudadela, la delegación al completo, se trasladó hasta el parque de Yamaguchi para plantar cinco cerezos, árbol típico en Japón. El presidente del Consejo, Hisao Takeda, volvió a encontrarse en el lugar donde cinco años atrás había plantado 20 cerezos. A Takeda le impresionó la belleza del parque y su gran extensión, pero sobre todo, «me alegró del afecto que siente la gente de aquí por el pueblo japonés», comentó. Sin embargo, Takeda sigue recordando una escena divertida. En su visita de una tradición que cuando llega la primavera y la lluvia, la gente se veía entristecida al saber que se acerca la lluvia, porque el cerezo es muy representativo de su país. Por esta razón, al estar dentro del Consejo, le da pena que los pamploneses no hagan lo mismo en el parque de Yamaguchi cada vez que se acerca la primavera. «Aun y todo, hoy abandoné a Pamplona con la esperanza de volver a visitarnos dentro de cinco años.», L.J.A.

Yamaguchi y Pamplona ratifican su amistad

LA CONVIVENCIA Y LA FIGURA DE SAN FRANCISCO JAVIER, EJES DE LA UNIÓN ENTRE LAS DOS REGIONES

La delegación japonesa visitó la ciudad para conmemorar el vigesimoquinto aniversario del hermanamiento

LAURA ILARREGUI

PAMPLONA. La jornada de ayer fue especial para la delegación de 32 japoneses que estos días visitan la ciudad para conmemorar el vigesimoquinto aniversario del hermanamiento entre Pamplona y Yamaguchi. Por la mañana tuvieron la oportunidad de visitar el monasterio de Leyre y los castillos de Javier y Olite. Y ya por la tarde, la Sala de Armas de la Ciudadela fue el lugar elegido para celebrar el acto del aniversario.

La alcaldesa de Pamplona, Yolanda Barcina, inició la ceremonia con el objetivo de renovar los votos de hermandad que unen a la «exitosa combinación entre Oriente y Occidente», representada en las dos ciudades hermanadas después de 25 años de trabajo y colaboración. Barcina destacó la unidad de los dos pueblos por encima de las fronteras con el único fin de proyectar un destino común. «Queremos decir sí a la amistad, la diversidad, la paz y la verdad», afirmó.

A través de este acto, que también estuvo presidido por Hisao Takeda, presidente del Consejo de Yamaguchi, y Kazuo Watanabe, ministro de la embajada de Japón en España, las dos ciudades estrecharon ayer de nuevo sus lazos y ratificaron la Carta de Igualdad firmada en 1980.

Hisao Takeda, que realizó el discurso en castellano y japonés, agradeció la bienvenida que la delegación ha tenido en Pamplona, así como el afecto de la gente desde que llegaron el pasado día 13. «He tenido la oportunidad de conocer los Sanfermines con la fascinación y la pasión de los pamploneses», explicaba. Pero sin duda, para él lo más importante de todos estos años ha sido la amistad que ha surgido entre ambas ciudades y que está representada en el parque de Yamaguchi, símbolo de hermanamiento.

No obstante, pese a que a los

LAS FRASES

"Hoy confirmamos nuestra Carta de Igualdad. Queremos decir sí a la diversidad"

YOLANDA BARCINA
Alcaldesa de Pamplona

"El parque Yamaguchi representa el símbolo de unión entre las dos ciudades"

HISAO TAKEDA
Presidente del Consejo de Yamaguchi



Un plato, entre los regalos ofrecidos al Ayuntamiento. FOTO: J. L. GARCÍA



La delegación sorprendió a una pareja de recién casados. FOTO: J. L. GARCÍA

habitantes de Yamaguchi en Japón, Pamplona les resulta «familiar» por los continuos intercambios que llevan a cabo, todos destacaron también la importancia que tiene la figura de San Francisco Javier entre ambos pueblos.

INTERCAMBIO DE REGALOS Una vez que el embajador japonés, Kazuo Watanabe, hizo pública la confianza que tiene en el «vínculo entre dos países separados por una gran distancia, pero que cada vez están más cerca gracias a la amistad», tuvo lugar el intercambio de regalos entre el Ayuntamiento de Pamplona y Yamaguchi.

Yolanda Barcina obsequió al presidente del Consejo de Yamaguchi con una figura de bronce de San Fermín. Por otro lado, Hisao Takeda entregó a la alcaldesa un plato lacrado de estilo guchi, típico de allí, un empujador de cerámica de Hagi, lugar muy famoso en Yamaguchi, y finalmente, la delegación japonesa entregó una lista de libros que van a regalar al Ayuntamiento de Pamplona para la biblioteca colindante con el parque Yamaguchi.

Acto seguido, y con la atenta mirada de los 32 japoneses presentes y las autoridades del Ayuntamiento pamplonés, como Jorge Mori o Luis Ibero, la Coral de Cámara de Pamplona interpretó diferentes temas relacionados con la música del Renacimiento, música de catedral y tradicional. Entre las canciones, estaba el tema *La Justa*, que representa un torneo medieval; un enfrentamiento entre dos caballeros.

5本の木の植樹 シウダデラでの25周年の記念行事後、訪問団は山口公演へと移動し、日本を代表する木である桜を5本植樹した。山口市議会議長である武田寿生氏は5年前に20本植樹した場所に戻ってきたのである。武田氏は、公園の美しさと広大さに感動したが特に「山口公園が市民に愛されていることを非常にうれしく思っている」と語った。しかし、武田氏が残念に思うこともあるそうだ。日本では、春が来ると桜の花が咲き、人々は木のまわりに集まり、花を鑑賞する。桜は日本を代表する花だからである。パンプローナ市民が春に花見をしないのは残念だと武田氏は述べた。武田氏は5年後に再び訪れることを願いながら本日パンプローナ市を後にする。（訳 吉武 真紀）

25 años de hermanamiento

■ Yamaguchi reafirmó ayer la alianza que sostiene con Pamplona desde 1980

ASER VIDONDO, PAMPLONA/JAVIER

La delegación de Yamaguchi (Japón), que llegó el pasado miércoles a Pamplona, acudió ayer por la tarde a la Sala de Armas de la Ciudadela para reafirmar con la capital navarra el hermanamiento que mantienen desde hace 25 años. Asimismo, acudieron durante la mañana a conocer los pueblos de Leyre, Javier y Olite.

El acto oficial estuvo presidido por la alcaldesa de Pamplona, Yolanda Barcina, el presidente del Consejo de Yamaguchi, Hisao Takeda, y el ministro de la Embajada de Japón en España, Kazuo Watanabe. «La idea de este acto es renovar nuestros votos de amistad internacional. Cumplimos las bodas de plata, pero llevamos más de 400 años hermanados gracias a la labor de San Francisco Javier», comentó Yolanda Barcina.

Hisao Takeda apuntó que la carta de hermanamiento firmada en 1980 decía que la intención era «fomentar y estrechar lazos de amistad», «un deseo compartido 25 años después».

Este acto institucional, que se cerró con un recital de la Coral de Cámara de Pamplona, dio paso a un acto simbólico en el parque de Yamaguchi, con la plantación de 5 nuevos cerezos, que se suman a los veinte ya plantados.

Asimismo, se intercambiaron regalos como signo de amistad entre ambas ciudades. La alcaldesa de Pamplona entregó a Hisao Takeda una figura de San Fermín de la colección de Javier Muro. Yamaguchi entregó a Pamplona un plato lacado, un encendedor de cerámica y una pequeña muestra de los libros que esta ciudad va a donar a la biblioteca de Yamaguchi, que hoy visitará.

Origen del hermanamiento

Han pasado ya más de 25 años de la firma del hermanamiento entre las ciudades de Yamaguchi y Pamplona, en febrero de 1980.

El primer contacto lo inició la ciudad nipona. En enero de 1979,



La delegación de Yamaguchi posa en la escalinata de entrada a la basílica del castillo de Javier.

JOSE ANTONIO GONZÁLEZ



A la salida del acto, los nipones se acercaron a una pareja de recién casados.

JOSE CARLOS CORDOVILLA

el alcalde de Yamaguchi, Yasuo Hori, envió una carta al entonces alcalde de Pamplona, Segundo Valmiana Sotolongo.

La razón expuesta para establecer una relación era la siguiente:

«El 10 de abril de 1979 celebramos el 50 aniversario de la elevación de Yamaguchi como ciudad y capital de la provincia. Para ello tenemos preparados varios festejos (...). Entre ellos, está el recordar

de diversas maneras la historia, que se remonta a la antigüedad, de esta ciudad».

Entre estos aspectos históricos, relacionados con Yamaguchi, se encontraba la figura «del gran navarro San Francisco Javier», por lo que ofrecían su «amistad» a Pamplona, como capital navarra.

Así, tras una visita oficial nipona en enero, y tras las primeras elecciones democráticas en las que Julián Balduz alcanzó la alcaldía, se tomó el proceso de hermanamiento en serio.

El 13 de noviembre de 1979 se consensó el texto que se iba a firmar, que abogaba por «intercambios culturales, educativos, turísticos e industriales», para «fomentar los lazos de amistad y comprensión mutuos, conscientes de que con ello contribuyen también a la paz mundial».

Este texto se firmó en el salón de Plenos del Ayuntamiento de Pamplona el martes 19 de febrero de 1980.

Hisao Takeda: «En Japón no hay edificios de piedra como los de Javier»

Durante toda la mañana, una veintena de miembros del grupo de Yamaguchi acudió a visitar Leyre y los castillos de Javier y Olite. Ricardo Sada, rector del Santuario de Javier, fue el encargado de explicar a la delegación de Yamaguchi algunos de los rincones del castillo de Javier.

«No van a poder verlo todo, porque las obras están todavía sin acabar», explicó. Por ello, sólo pudo enseñarles la basílica, el patio de armas y la capilla del Cristo, «donde Javier rezaba de niños».

La expedición japonesa miraba con asombro los detalles de piedra, mientras un intérprete traducía las palabras de Ricardo Sada.

«El origen de todo es la torre, que es del siglo XII. El resto se fue construyendo durante los siglos XIII y XIV. En el siglo XIX, se derribó una torre paralela que había, donde estaba la capilla original en la que nació Javier, y se construyó lo que hoy es la basílica, con criterios modernos, pero de estilo románico», expuso el rector.

A la entrada de la basílica, lo que más llamó la atención a los japoneses fue la inscripción «Amaguchi (Yamaguchi) en el timpano de la portada». «Son todas las ciudades por las que el santo navarro evangelizó», señaló Ricardo Sada.

Hisao Takeda, presidente del Consejo de Yamaguchi, señaló sentirse asombrado por los edificios históricos de nuestra tierra: «En Japón no hay edificios de piedra como los de Javier o Leyre. Son realmente magníficos».

Al no poder recorrer todo el castillo, han prometido volver en una próxima ocasión. «Algunos de los ciudadanos han comentado la posibilidad de volver en 2006», comentó Hisao Takeda. Desde Javier se dirigieron a Olite, para conocer el castillo y comer.

Tres técnicos nipones para el jardín

A.O. PAMPLONA

El principal símbolo del hermanamiento que Pamplona y Yamaguchi suscribieron hace 25 años tiene sin embargo ocho de existencia: el jardín japonés del parque de Yamaguchi.

Desde antes de su inauguración, el 30 de junio de 1997, y también con posterioridad, varios técnicos nipones se han encargado de mantenerlo a punto y de que cumpla con las principales características que debe reunir un jardín de este tipo. Ayer mismo, aprovechando la presencia de la delegación de Yamaguchi en Pamplona, el presidente de la Asociación de Jardinería de la ciudad nipona, Kaoru Okamoto, dedicó buena parte de la mañana a redecorar los más de 4.000 metros cuadrados que

■ Kaoru Okamoto, Toshio Okabe y Ryuji Takesita realizaron algunos arreglos en el jardín japonés de Yamaguchi

ocupa este jardín y lo hizo ayudado por otros dos técnicos: Toshio Okabe y Ryuji Takesita. «Es la quinta vez que viene a Pamplona y dice que está contento con la forma en que se mantiene», traducía el intérprete de los técnicos, Kondo.

Podar para dejar ver

Buena parte del cometido de los tres jardineros y de la docena de técnicos de Ekilore que les ayudaron bajo el mando de Carlos González, jefe de jardines del Ayuntamiento de Pamplona,

consistió principalmente en podar la mayor parte del arbolado que rodea el estanque.

«En los jardines japoneses hay costumbre de eliminar las ramas más bajas para permitir así ver el estanque mientras se pasea y, sobre todo, para ver la cascada», explicó Okamoto. De esta forma decenas de ramas de un sauce llorón fueron podadas y luego retiradas y lo mismo ocurrió con otros ejemplares del jardín.

Poco después de la una de la tarde, para rematar el trabajo, se izaron en un poste dos *kainoboris*, una especie de mezcla entre bandera y cometa con forma de carpa y que únicamente se exhibe en situaciones especiales. «En Japón se celebra el 5 de mayo la fiesta de los niños y el 3 de marzo la de las niñas y es entonces cuando se izan estos *kainoboris*



Los técnicos japoneses dieron instrucciones a los jardineros de Pamplona.

CALLEJA

que representan una carpa macho y otra hembra, porque es un pez fuerte que sube por las cascadas y con ello se muestra el deseo de los padres de que los hijos crezcan fuertes», dijo Okamoto.

El jardín japonés de Pamplona reúne todos los ingredientes tradicionales: cascada, colina artificial, puente de piedra, arce japonés, pagoda y playa de piedra.

姉妹都市締結から25周年

山口市は1980年以来保ってきた結びつきを昨日再確認した。

水曜日にパンプローナ市に到着した山口市の訪問団は、昨日の午後シウダデラの「武器の間」で25年前の姉妹都市締結の友好関係を再確認した。また、同訪問団は午前中レイレ、ハビエル、オリエ等の各村々を訪ねた。

パンプローナ市長、ヨランダバルシナ氏、山口市会議議長、武田寿生氏、日本大使館公使、渡辺和

夫氏により公式行事が執り行われた。

「この記念行事は両市の友情を確認することを目的としています。私たちは銀婚式を迎えたわけですが、実はサビエルのおかげで400年の友好関係を保っているのです。」と市長のヨランダ・バルシナ氏は述べた。

武田寿生氏は、「1980年の姉妹締結の文書には友情をはぐくむことを目的にすると書かれていますが、それは私たち皆の願いです。」と述べた。

この後、パンプローナ合唱団による合唱で25周年記念行事は終了した。そして山口公園に20本ある桜に加えて5本の桜が植樹された。

また、友情の印として記念品の交換が行われた。パンプローナ市長はハビエル・ム口のサンフェルミン像を贈った。山口市はパンプローナ市に塗りの盆、香炉、山口図書館に送る書籍のリストを贈呈した。

武田寿生氏：日本にはサビエル城のような石の建物はありません

午前中、約20人の山口市の訪問団はレイレ、サビエル城、オリテ城を訪れた。サビエル城博物館の館長のリカルド・サダ氏が山口市訪問団にサビエル城を案内した。「工事が終わってないので全てをお見せすることはできません。」と語った。サダ氏はバシリカ、中庭、礼拝堂を案内した。この礼拝堂はサビエルが子どもの頃お祈りをした場所である。

リカルド・サダ氏の説明を通訳が訳しているのを聞きながら、訪問団は石でできた建物驚いた様子だった。

「12世紀に塔が建てられ、13世紀、14世紀にその他の建物が建てられました。19世紀にそれまであった塔に並んでもう一本の塔が立てられ、現在ではバシリカになっています。現代風な建物ですが、ロマネスク様式を取り入れています。」館長はこう説明した。

バシリカの入り口に書かれたAmaquchi（山口）という言葉が訪問団の注意をひいた。「サビエルが布教した全ての都市の名前が書かれています。」サダ氏が説明した。

山口市議会議長の武田寿生氏は、当地の歴史的建造物に感心していた。「日本にはサビエル城やレイレ修道院のような石の建物がありません。本当に素晴らしいですね。」と語った。

サビエル城を全て見るができなかったので再度訪問を予定している。「訪問団の中には2006年にまた来るという人が何人かいます。」と述べた。訪問団はサビエル城からオリテへ向かった。

3人の技術者が庭園の手入れに オカモト・カオル、オカベ・トシオ、タケシタ・リュウジが山口公演の日本庭園の手入れをした

パンプローナ市と山口市は25周年前に姉妹都市になったが、姉妹都市のシンボルは8年前に完成した。

1997年6月30日に山口公演の落成式を祝い、その前から、またその後も、何人もの日本の技術者が日本庭園の特徴を失わないように維持し続けてきた。昨日の午前中、造園会長のオカモト・カオル氏はオカベ・トシオ氏タケシタ・リュウジ氏と共に、4000平方メートルの庭園の手入れをした。通訳の近藤氏は「パンプローナへの訪問は5回目だそうです。日本庭園はよく維持されているそうです。」とオカモト氏の通訳をした。

3人の庭師とパンプローナ市の責任者のカルロス・ゴンサレス氏を中心とした12人の庭師が池の周りの木を主に剪定していった。

「日本庭園ではサンボするときに池や滝が見えるように下の方の枝を取り除くのです。」とオカモト氏は語った。こうして何十ものシダレヤナギの枝が切り取られ取り除かれた。

1時過ぎ頃、仕上げに鯉のぼりが飾られた。鯉のぼりとは旗と風のまじったようなもので特別な行事に飾られるのである。「日本では5月5日に飾ります。鯉は力強く滝を昇る魚で、親が子どもに強く育てて欲しいという願いが込められています。」とオカモト氏は語った。

パンプローナの日本庭園には伝統的な要素が全て含まれており、滝、築山、太鼓橋、紅葉、灯籠などがある。

(訳 吉武 真紀)